

弓道と人生 — 阿波研造範士の教え —

東京都立大学名誉教授 千葉 正士(まさじ)

大正八年、島根県生まれ。東北帝国大学法文学部卒。東北大学院法哲学専攻特別研究生修了。法博士。東京都立大学法学部教授、のち東海大学法学部教授。

聞き手 金光 寿郎

金光… 今日は「弓道と人生」というテーマで、昭和十四年に亡くなりました阿波研造(あわけんぞう)範士の教えについて、東京都立大学の名誉教授で、つい先程までスポーツ法学会の会長をなさっていた千葉正士先生にお話をお伺い致します。どうぞよろしくお願い致します。

実は、阿波研造という先生のことを、オイゲン・ヘリゲルという方の『弓と禅』という本を読んで知ったんですが、その中には東洋の宗教とか、芸道の神髄を師弟伝授と言いますか、どういふふうになんかそれが伝わるのかなというのが、実際に描かれているんで、非常に吃驚したんですが、その阿波範士の生涯とか、教えについて、今日お話をいろいろ伺いしたいと思います。どうぞよろしくお願い致します。

まず、最初にその千葉先生と阿波先生とのご関係、最初はどいつのことだったんでございましょうか。

千葉… はい。私は佐沼という宮城県の田舎で中学に入りまして、まもなく弓の稽古も始めました。そうしますと、仙台には阿波研造範士というですね、立派な射を引くということで日本でも第一番という方がおられました、旧制の第二高等学校、二高とそれから東北大学の師範をしておられるということを知りました。ですから昭和十四年に私が二高に入りますと、早速、弓道部で弓を引くことに致しました。運が悪く、入学の直前に先生亡くなられたものですから、実際の指導は、阿波先生の後を継いだ神永政吉(かみながまさよし)範士という方に仰ぎましたし、毎日毎日の稽古では当然部の先輩にですね、それから時折阿波道場に通っては高弟方からも教えて頂いたということです。

金光… お目にかかったことはおありではないんですか。

千葉… 同期の諸君はみな会ったことないのですが、私、その前の年の夏休みに、たまたま何回か阿波道場に自分で稽古に伺った時に、一度だけ、偶然、幸いなことにお会いしたことがありまして、その時、とにかくもう名にし負う先生ですから、私、緊張したんですが、その時感じたのは限りのない「温容」ということですね。どんなにへまをしても受け入れて下さるということと同時に、またこれが無限の「峻厳さ」ですね。どんなに峻厳化しても逃さないという「温容」と「峻厳さ」、両方これだけ兼ね備えた人物というのは、私、会ったことありません。それで一遍に傾倒したというようなことです。

金光… そうしますと、旧制の高校から大学でその先輩諸氏から、いろいろ話を教えられる時にも、その一度お目にかかっていらつしやる阿波先生の姿というのは、その言葉を通して生きてくるということではございませうね。

千葉… そうだったと思いますね。私は、大学を出てから学問の世界に入りまして、弓はその後休んだこともありまして、今では時折引いているだけです。おそらく日本には何百万人もいる愛好者の一人で、阿波先生とそれから弓道のことについて、私の経験をお話するという資格は、私はないと思っております。ただ一つ大変いい幸運に恵まれたことがあります。それは先生が亡くなった後に、先輩方が、この弓の心を是非後世に残したいということで、遺稿集を刊行することに致しまして、私が大学時代にその実務を担当致しました。



金光… そうしますと、阿波道場にしょっちゅうお出かけになっていたというふうにございますか。

千葉… そうですね。道場にも参りましたが、ご遺族の方から、大きな風呂敷包み、一つの資料をお預かり致しました。先生は学者でありませんから、立派な論文とか原稿とかはなくて、手帳とかノートなどに、その時折のご自分の考えたことをメモに書いていたのが残っていたのが主ですね。その他切り抜きとか、講演原稿とか、そういうものを、私、整理しまして、後輩諸君の手伝いによって原稿用紙にしました。一応遺稿集稿本と名付けて原稿を用意したんです。

金光… そうですか。

千葉… ところが間もなく終戦ですね、武道が追放になりましたから。しばらく仕舞っておいて、やがて解禁になりましたから、どうしようかと思っただんですが、私自身がやるよりも、桜井保之助(やすのすけ)さんという先輩がおられまして、この方は直接、阿波先生の指導もじっくり受けましたし、それから政治哲学の研究家なので、お願いしたところがお引き受け下さって、自分でもまたたくさん資料を集めて、立派な伝記をお作りになりました。これは部内の限定本ですけども、大変貴重な本になっております。そういうご縁で今日金光さんともこういう機会が得られたわけです。

金光… そういう先生、これまでの阿波先生とのご関係の中からいろいろ教えて頂きたいと思いますが、実は私、先程申し上げたように『弓と禅』を読んで非常に吃驚すると同時に感銘を受けたんですが、現代の日本人にも阿波先生の弓道というのを紹介するのにやっぱりオイゲン・ヘリゲルさんの『弓と禅』の中に出ていうようなところから紹介して頂くのが非常に分かりいいんじゃないかと思えますので、その最初にオイゲン・ヘリゲルさんの本の方から話を伺いたいと思いますが、オイゲン・ヘリゲルさんという方はどういう方なんでしょうか。

千葉… 大正の頃からドイツに現れた哲学者ということですね。カントの流れを汲む方です。その頃、日本では学問特に哲学と言えばドイツですから、東北大学でもその哲学の指導者をわざわざ招聘しまして、学生の為に講義したんですね。勿論、先生方も一緒に勉強したわけなんです。そのオイゲン・ヘリゲルさんが、折角、日本に来るのですから、日本文化を研究したいと言って、相談したら丁度阿波先生がおられるということで、弓の稽古をするようになったわけです。稽古することになりましたけれども、何せこれは大変な問題なんですね。日本の芸道、武道というものは言葉を使わないで、無言の間に自得するというそういう文化。ところがヘリゲルさんのドイツ文化というのは、何ごとも概念と言葉で表現しないと分からないということです。ですから言ってみると、ドイツ精神が日本文化と格闘したということになります。普通なら途中で止めてしまうのですけれども、とうとう日本におられる五年間に、立派なものになされた。その記録が今の本と、それからもう一つ、その前に最初に講演した記録の本で『日本の弓術』と言っております。この二つが主な資料ですね。

金光… それではその内容について伺いたいと思いますが、実は私も、弓は最初は力で引くんじゃなくて、呼吸で引くんだというようなことが出ているんで、弓は力でなくてというのをずっと聞いていたことかなと思ったんですが、これはどういふことなんでしょうか。

千葉… それはなかなか解り難いところですが、確かにその通りですね。ですからヘリゲルさんも力一杯引こうと思ったのですけれども、先生からそう言われる。ヘリゲルさんの書いたものを読みますとですね、息を引き込んだら、それを静かに下腹に押し下げて、そこで一度溜めて、今度は静かにそれをまた吐いていくという。こつこつくりした呼吸と吸気を繰り返すことが、律動的に自然に行われるようになりますと、身体の方も抜ける、それから肩や腕の力を使わなくとも、弓を引けるようになると言っんですね。それでそんなことあるものかと思っただのですが、実際に先生が腕に触れてみなさいと言っつので、先生の引いている腕に触ってみると普段の通りフニャフニャなんですね。それでこれはやっぱり証拠がありますから、自分はそういう訳で勉強しようということになりました。これは我々が腹式呼吸ということですね。それでまあ大体一年位したら要領が解って来たということでした。

金光… 先程、映っていました写真は、その辺の呼吸がちゃんと出来て射の姿勢を取っていらっしやる、そういう写真でございますね。

千葉… ええ。え…と、これの写真の下の方、足の方出ませんでしょうか。

金光… 足の方がやっぱり問題なんですか。

千葉… はい。姿勢なんですね。実はそういう深い呼吸をするというのには、姿勢、つまり土台がしっかりしていないと出来ませんので、それで日本では坐禅とか、静座法というのがございます。それは坐って致しますが、弓となるとそれを立つてするわけですから、余計その土台が大事で、そのために両足はもう大地に吸い付いたように盤石に構えて、そして重心をその足の真ん中にストンと落ちるようにして、その呼吸をするわけです。

金光… その写真はかなり出来ている写真、

千葉… これはもう出来ている体の構えと申せますですね。

金光… それじゃ、そういう呼吸が出来て来ますと、その次に今度問題になるのは、その矢を放すのではなくて、矢が放れるようにしなさいじゃなくて、放れるようになるんだと言いますか。その放し方が難しいんだそうですね。

千葉… そうですね。

金光… 放すんじゃないと言われても、何時放すかという考えるんじゃないかと思いますが、その辺はどういうことなんでしょうか。

千葉… これはもう最初からですね、呼吸姿勢の時から、出て来る問題ですが、弓を引くというのは右手に弓懸ゆがけという小手を填めまして、その親指の腹に弦を当てて引つ張るのですが、そのままだと親指が外れますから、指を二本か三本、親指の頭に添えて、押さえて、それで腕ごとこう引く形になりますね。ですから矢を放すとなるとこの指を放さなくては飛んで行かないわけです。そこに弓の技術があると誰でも思うわけですね。ところが阿波先生は放してはいけないと言います。でいろいろ伺ってみますと、放すというとは、どういうようにこの指を使うかといういろいろ苦心惨憺して、それからいい指の使い方をして、上手く矢を放して立派な射を作ろう、あるいは的に当てようと思う。要するにそこには個人の欲望、作為があるわけですね。そういう作為がありますと、どうしても作為の微妙な心の氣

持ちがこれに反映して放れは乱れて来る。で、そういう作為と闘ってそれを消そうと努めるのですね。同時に体の力も今の呼吸で抜けて来ますと、その自分の心と身体との闘いのある極致で自ずから弦の手は放れてゆきます。

金光… じゃ闘いというような言葉もなくてですね、ある状況まで、いわば上り詰めると言いますか、そうやって来ると自然に放れるという。

千葉… そうなんですね。それでヘリゲルさん最初解らなかったのですが、その内にですね、これをその言葉によりまして「自己自身からの離脱」という言葉で表明しておりますね。そしてつまり自己的な自我をなくして、もっと大きな人間の力で引くということです。だから自分が引くんじゃなくて、「それが引くという。ドイツ語で言うところの」で、英語で言うところですね。つまり何か解らないあるものが引くと、そういうふうに表現をしておりますね。

金光… ただその弓の話しところでやっぱり工夫されて何か破門されなかったということがあるんだそうですね。

千葉… ええ、そうです。それはですね。今のよう呼吸と、それから放れと申しますね、その仕方をいろいろ工夫して頭では解ったのですが、しかし実際にはなかなか出来ない。なかなか出来ないけれども、先生のいうように自然に放れるということにはやっぱり何かの指の工夫があるはずだと。いろいろ工夫するけれども上手くない。そのうち、ある時ですね、もう一年以内に帰るということになった夏休みらしいのですが、上手い工夫を思い付いたんですね。指をこうすればいいと、それで自分では上手いくと思って先生の所へ言っ引いたんですね。で上手くいったと、

金光… ご本人は上手くいったと。

千葉… そして先生の顔を見たら先生がじつと変な顔をしている。そしてもう一本と言ったということです。ヘリゲルさんもう一本引きまして、前よりもよくいったと思ったのですが、そして先生の顔を見たら意外なことがあったので、それをヘリゲルさんの本が書いたところを読んでみます。

金光… 〴〵自分の言葉で、

千葉… 「その時師範は無言のまま私に向かって歩みより、私の手から弓を取り上げて、私に背を向けたまま、座布団の上に座った。私は、これが何を意味する事になるのか分かったので、引き下った。」と。

金光… じゃ、何も批評も何もされないで、あのそっぽを向いてと言いますか、

千葉… そうです。

金光… 背中を向けてしまわれたという。

千葉… そうです。

金光… それはダメだったと思われたわけですね。



千葉… 阿波先生がその時どう考えたかということとは分りません。でも、ヘリゲルさんは、弓を取り上げられたというのは、もう稽古を止めるということだろうと察しました。先生はこれだけ終始言ってきたのに、私はその教えに背いて細工をして放そうとしたのだと、すぐ感じたのですね。これはやはり自分が悪かったと思って、そこで気が付きまして、通訳の先生からお詫びを入れて、これからは先生のおっしゃる通りにしますからと言って、お許しを得たと、そういう話があるんですね。これは先生も先生、弟子も弟子という話だと思いますね。

金光… それでそういう工夫でないとこの射をそのまま続けてお稽古なさったわけですね。

千葉… そうですね。

金光… もう私何かもヘンゲルさんのおっしゃるように、弓というのはやっぱり的を当てようということが大前提としてあるんじゃないかと思いますが、その『弓と禪』で吃驚したのは的を狙ってはならないと、的を狙うんじゃないと言われたらこれまた困ると思いますが。

千葉… それはですね、やっぱり阿波先生の弓の一番の特徴と言っているかと思いますが。勿論、他にも当てることを狙ってはいけないという方はおりますけれど、阿波先生は徹底しておりましてですね、的の前で引くけれども、狙ってはいけないときびしく言います。要するに自分を捨てて本性を発揮するような射を努めろということなんですね。それでその先生の教えの気持ちにはヘリゲルさん頭で解ったつもりですが、ほんとには解らないものですから、そこはドイツ人で、くどくどと質問するんですね。

金光… そうでしょう。

千葉… それでそれを何回かやっている中に、ある日ですね、とうとう先生もそれじゃ今晚一人で来なさいということになりました。いつもの通訳の方は行かないで、一人だけ行ったら、その晩、衝撃的なことが起こりました。先生が蚊取線香に火を点けまして、それを持って行って、的のあるところを（あずち）と申しますが、その（あずち）の的の前に立てまして、電気を消したんですね、ですから真つ暗闇でちょっと見たら的があることも分らない。

金光… 電気を消したもんですから。

千葉… ええ。

金光… 線香の火が点いて、

千葉… 線香はですね、そこに立てたことを知っていますから、そう思っていると線香らしい火があるということとはすかに分かる。そこで阿波先生が静かに弓をお引きになったんですね。で第一の矢、弓はご承知の通り二本一組で引きますので、最初の矢を甲矢（こうや）と書いて「はや」呼びますね。それから二本目を乙の矢と書いて「おとや」と言います。で甲矢（はや）が立派な響きを発して、的に当たりました。二本目もまた同じようにあたったんですね。それでヘリゲルさんが、今のは立派な射だったなと思って（あずち）に矢を取りにまいりました。そこでヘリゲルさんが大変なことを発見したんですね。そのところをまた読んで見ます。

「（あずち）の燈をつけた時私は、甲矢（はや）が黒点の中央に当り、又乙矢は甲矢の筈を砕いてその軸を少しばかり裂

き割って、甲矢と並んで黒点に突き刺さっているのを見出した。私は呆然とした。そしてその矢を別々に引き抜くに忍びず、的と一緒に持ち帰った。」

とこう書いているんですね。

金光： そうしますと、その最初の矢が当たっている。その矢の軸に次の矢が刺さっているということですか。

千葉： そうですね。

金光： 二本の矢が一本になっていると。凄いことですね。

千葉： そうですね。これは後で阿波先生が他の人に話したと言ったことなんですが、「別に自分はそんなことを、もうとう狙いもしない。的も狙ったつもりはないけれど、そういうことが起った」ということでした。なおその時、ヘリゲルさんが矢を取りに行ったけれど、なかなか帰って来ないのでおかしいと思って「自分が行つて見たら、そうしたらヘリゲルさん、そこに、的の前にベタツと座ったまま動かないでいたというんですね。それほどの大きな衝撃だったようです。

金光： そういうことは、暗いからの的は当然狙いにくいわけですね。でも暗闇の中での的を狙わない矢が、しかも二本が全く同じ所へ行っている。証拠としての的を狙わないでもこういうふうになるんだという、その見事な実例が目前に、こう展開されていたということですね。

千葉： そういうことですね。それでおそらくヘリゲルさんは納得なさっただろうと思うんですね。自分が解らないところで、解らないそういうものがあると。これこそ哲学の求めるところだというふうにおそらく悟ったに違いないと思われます。

金光： そうですね。そういうことになると言葉ではやっぱり説明出来ないところでしょうから。それで、じゃ、そういう狙わない射を練習しようと言いますか、それで稽古を励まれたということですね。それで狙わないでやっているとしたし、しかも放そうと思わないで放れてという、その段階はその次はどういうことになるんですか。

千葉： ですから、それでヘリゲルさんは一つの悟りがありまして、その頃から弓の境地、射境というのは進んだようですね。そして自分では分からないのですがある時先生の前で引いていたら、先生が自分に深々とお辞儀をしたと言うんですね。それで呆氣にとられていたら、先生が今度は丁寧にヘリゲルさんをこちらに呼んで、そして、

「今日の稽古は、もうそれで結構ですからお帰りなさい。何故かと言うと、今の射はあなたが引いた射ではなくて、”それ”が引いた射です。つまり個人の作為ではなくて、弓を引く人間の力が自然に現れて自ずからに放れた立派な射です。私はあなたにお辞儀をしたのではなくて、立派な射にお辞儀をしたのです。思わずお辞儀をしたのです。」
こう言うんですね。

金光： これはさつきドイツ語で *es*、それから英語で言う *it*、”それ”というのは”それ”としか言い方がない、表現のしようがないから、”それ”と言ったと、そういう言葉を使われたんでしょうが、いわば、その作為とかそういうものが全くないところで自然にその弓の弦から矢が放れて当たる、その全体を差して”それ”とそういう表現をされた。

千葉： そういうことだろうと思いますね。

金光： これはやっぱり一度それが出来るといつも出来るといふことではないんですか。

千葉： 絶対にそうではないです。

金光： そうじゃないんですか。

千葉： そういうですね、先生もお辞儀をなさる射というのはヘリゲルさんのこの本では二度出てきます。滅多にないと思います。

金光： 滅多になくて。

千葉： はい。だからこの前上手く行ったからと思ってその通りやろうと思っているとダメなんです。

金光： そういう思った途端にそれが出てくるんですか。

千葉： この前の通りやろうとすると、そこにもう作為がござえますね。或いは自分を捨てようと思う、その思う心がいけない。その点ではやっぱり禅の「無」といふのと共通しておりますね。

金光： そうするとその辺を分析してですね、この前はこつこつ積みりでやったから良かったとか、なんて考えると、もうそれだけおかしくなるといふことですね。

千葉： その通りですね。

金光： そうすると毎回そういうことなしにやれるように練習するということとは、またしかし人間のその心の動きとは逆行と言いますか、人間とはすぐにそういうふうを考えるように出来ているわけですが、すぐそういうことを思っているとそれを払い捨てて射の方に熱中すると言いますか、そういうことを続けていくわけですね。

千葉： 何時も何時も、一射ごとに、ああ失敗、ああまずかった、この次はこつやろう、そう思っただけでいいわけですね。

金光： そういうことも考えてはいけません。良かったら良かったと、つい思いますがその良かったと思うこともいかなと言ふことなんでしょうね。

千葉： ええ、あのね、そのところはどつ言ったらいいんですか、むしろ、いい射が出る時は本当に気持ちがいいですね。ああ、これで自分も弓を引けたという安心感を持ちますね。

金光： じゃ、それと同じにしようと思っただけで。

千葉： そうですね。だからそういう安心感の出来る弓が毎回毎回引けるようにならないといけないかと、百本に一本じゃいけないだと、千本に一本じゃいけないだとそういうふうに関心するを得ませんですね。

金光： そうしますと、常に前に出たからそれでいいじゃなくて、毎回毎回、その向上の道というのはずっと続くということですね。

千葉： 人間だから、いい射が出たと思っても、その次必ず失敗しますと言ってもいいと思いますね。

金光： はは、なるほど。そういうその指導された方、阿波先生、阿波範士という方は一体どういう方だったのかというのは、これからお伺いして参りたいと思いますが、その阿波範士の生涯について、先生に略年表を作って頂いておりますので、それを拝見しながら、それじゃご説明頂きたいと思います。

阿波研造範士の生涯

明治十三年（一八八〇） 四月四日宮城県桃生郡大川村生まれ、小学校卒業、大忍寺住職から和漢の思想を学ぶ。
明治三十一年（一九〇） 漢学塾を開く
明治三十二年（二〇歳） 石巻の阿波家の養子に、
明治三十三年（二一歳） 弓術師範木村辰五郎に入門
明治三十五年（二三歳） 講武館開設（弓道、剣術、柔術、居合、抜刀術、薙刀）
明治四十二年（三〇歳） 弓道場開設（儒教、仏教、武道一体の弓道）
明治四三年（三一歳） 東京の弓術師範本多利実に入門
大正九年（四一歳） 深夜、道場で心身の大爆発を体験
大正一二年（四四歳） 新弓団（大射道教）設立
大正一三年（四五歳） オイゲン・ヘリゲル入門
昭和四年（四九歳） オイゲン・ヘリゲル帰国
昭和十四年（六〇歳） 三月一日永眠

明治十三年、一八八〇年に、今から百年ちよつと前に、宮城県の桃生郡大川村の生まれで小学校卒業されて、後は、そのお寺のご住職からその和漢の思想を勉強されていて、それで十九歳の時にもう漢学の塾を開いていらつしやるというから、相当の秀才だったということでございますね。それで二十歳の時に石巻の阿波家の養子に行かれたということですが、阿波家というのはどういいうお家だったんですか。

千葉： はい。生家も阿波家です、麴の製造販売をしていましたんですね。その頃まだ日本では、どこの家でも味噌醤油は自分の家で作っておりましたから大変需要があったわけです。

金光： そこで阿波家に養子に行かれながら、弓とか武道の勉強をされるということで、二十一歳の時には弓術師範の木村辰五郎という方のところへ入門されておりますけれども、あと二年たつて講武館という武道道場を開いていらつしやるんですね。ただ吃驚しますのは、弓道、剣術、柔術、居合、抜刀術、薙刀、武道全般を稽古練習をなさっていたわけですね。

千葉： そうですね。それと同時にやはり儒教、禅、古典類をその頃から読み漁っておられたんですね。

金光： それで三十歳の時に明治四十四年、弓道場を開設。これは場所は石巻でなくて仙台にもう出ていらつしやるわけですか。

千葉： そうですね。どうもその頃から、日本の社会が大いに発展しまして麴の需要がずっと少なくなりました。そこで思い切つて家業を捨てて、もう弓道一本で身を立てようと思った。そうするとやはり、石巻よりは仙台の方がいいということで、仙台に新しく道場をお作りになって弟子を教えながら、自分でも勉強するという、そういう生活に入つたわけですね。

金光： でもそれまでのいわば教養と云いますか、いろんなその和漢の学を勉強されているということですから、その武道の弓の指導の場合も、そういう儒教だとか、仏教的な思想みたいなものが背後にあつて、それでその裏付けの元に、弓の指導をなさっていたと、そういうことなんですね。

千葉： そうだと思います。

金光： ところが、その年表を拝見しますと、道場を開かれた後で、東京の弓術師範本多利実という方に入門されておりますが、これはまたどういふことでございましょう。

千葉： やはりですね。自分ではあるところまで行つたように感じて、それから、もうその地方で有名になつておりましてけれども、まだ弓の道は先がありますし、そして日本では、その頃やはり東京が中心で、弓には昔からの流派がたくさんある中で本多流というのがだんだん名声を得て参りましたので、そこに入つて一層勉強しようと思つたんですね。

金光： これはあの私なんか案外、弓で当てるだけだつたらもう道場を開かれる位ですから、的に当てるだけだつたら十分技術はお持ちだつたんでしようけれども、やっぱり的に当てるだけでは物足りないというか、もっと奥が深い筈だとか、そういうところまで含めての再入門ということなんでしょうね。

千葉： そうだつたと思いますね。そこで勿論、本多流宗家の師範の教えもありましたけれども、全国から立派な門弟達が集まりましてね、その兄弟弟子から教えられることも多かつたようですね。

金光： そこで東京の道場での指導も受けながら、だんだん弓の道を深く歩まれて、何か日本一にもなつていらつしゃるんですね。

千葉： その頃はもう「大日本武徳会」という全国組織が出来まして、弓でも年に一度大会があつてその大会で毎年一人ずつ優勝者が出ていますね。それに大正八年に優勝致しまして、これは毎年の優勝者の中でも大変際だつ立派な射であつたと言われておるんですね。

金光： これは立派に当てるだけではなくて、射の姿勢とか色んな全てを総合して、最高位であつたと。

千葉： そうなんですね。それでも実は阿波先生、満足されないんですね。自分で何か足りないものがあると感じておられたらしくて、一生懸命求めておられる。そうしたらその後何年でしょうかね。

金光： 大正九年ですね。

千葉： 大正九年ですか。先生自身が大爆発と言われる大変な機会が訪れたんですね。

金光： あの深夜道場で心身の大爆発を体験したという大正九年のこと。これはどういふことなんですか。

千葉： そのところはですね。その時の経験を先生自身でメモした言葉があります。それを桜井さんがノンフィクションふうにご書いていらっしゃるがあるので、それをちょっと読ませて頂きます。

「ある深夜、家族も寝静まり、四周は寂として音なく、月が穏やかに夜の闇を照らすのを見るだけである。研造は一人道場に入り、愛用の弓矢とともに、静かに的に進んだ。肉体が先きに滅びるか、精神が生き残るか、一歩たりとも引かぬ覚悟の射であった。苦闘が続く。肉体は既にその限界を超えた。我がいのちもここに究まる。遂に滅びた。と思った時、天来の妙音が響いた。天来と思ったのは、これまで自分にも耳にしたことのない、もっとも澄明で、もっとも高く強い弦音であり的中音であった。聞いたと思った同じ瞬間、自己は粉微塵に消し飛んで、目も眩む五彩のうち、天地宇宙に轟々たる大波紋が充滿した。自我がどこかに雲散霧消したため、全くとりとめようもない。果然自失どころではない。まさに恍たり、惚たりの状況が、時間を越えた時間の中に続いた。」

（『阿波研造』）

先生の言葉を連ねてみますと、こういうように表現できるのではないかという体験があったわけですね。

金光： これは後年、“それ”が得たと。先程の説明に“それ”が得たんだというような言葉がありましたけれども、それがその最初にそういう体験された、要するに人間の、その平素の意識なんか全部吹き飛んでしまう、それこそ天地一体と言いますか、よく禪なんかで凄い見性体験なんかなさると、もう色んなそれまでの自分の何も吹っ飛んでしまうという、それをその弓を、その射の中で「体験になった」とそういうことでございませうね。

千葉： そういうことだと思いますね。

金光： それでそういうことで、それが大正九年、四十一才の時ですが、その後大正十二年には「大射道教（たいしやど）うきよう」という新しい弓団を作っていらっしゃいますね。これはどういうことだったんでございませうか。

千葉： 先生はですね、自分は別に一派を開いてその流祖になろうなんか考えていなかったようですが、本多門下で大勢の人が全国から集まって来るうちには、色んな意見の人がおりまして、中には的を狙わない弓なんて、それで弓かと言う人もおりました。

金光： 正反対ですね。

千葉： そうですね。

金光： 的を狙わないんだというのと。

千葉： ええ。まさに的にピタツと的中することこそ、弓の目的であるという人がいて、それで後に日本の指導者になった方がおられるんですね。そういう人たちの、要するに阿波弓道に対する批判が、だんだん強くなって来た。阿波先生の名声が上がると同時に、それも出てくる。そうすると、先生はもう自分の道を行けばいいと思っていたけれども、やっぱり先生の弟子になって来た人たちが収まらない。どうしても阿波先生の弓を、そういう俗世間の俗な弓と違うものとして立てなければいかんというわけで、むしろ弟子達が集まって、弓の正道を守るグループを作ったというわけでした。射、射る射と、それから宇宙人間の道と、それからそれを人に伝えていく教えと、全てが一つになったものという意味で、「大射道教」というふうな名前をとったらしいようですね。

金光： そういう、まあその阿波範士を取り巻く色んな人たち、色んな方が自然発生的に出来た教団が出来た頃、その次の年ですね、大正十三年に、先程のオイゲン・ヘリゲルさんが入門されているわけですね。それで足掛け六年、昭

和四年にヘリゲルさんがお帰りになった。それから後、十年経って六十才の時に亡くなられたということですが、先生がお会いになったのは、最晩年の十四年にお会いになっていらつしやる。

千葉： 十三年の夏休みですね。

金光： あ、十三年の夏休みにお会いになった。でその阿波先生の教えというのを、千葉先生が高弟の方達から教わった。色んな人に応じて色んなことを説いていらつしやるでしょうけれども、千葉先生が受け止められたところでは、どうという言葉で教えられた点が印象に残っていらつしやるか。

千葉： 私は三つの言葉で集約出来ると思うんですね。実は先生、若い時から如何にして自分の求める心を表現しようかと思つて、色んな古典類など漁つておられましたから、その時々によつて、これはいいと思つた言葉を書き残しておられまして、そういう言葉が沢山あります。それをだんだん練り上げて行つて、私が知っているのは、勿論、晩年の用語ですが、それだけに円熟したと言つていいと思うんですね。その最初は「一射絶命いつしやぜつめい」ということで、これはもう既にお話に出ましたように、個人のあらゆる欲望や作為を捨てて、捨ててというのは、実は間違いないで、捨てるという欲があつてはいけませんので、つまり個人の作為、欲望を超越するということですね。そうすると、どうなるかと言いますと、体の力で弓を引いている、その身体(しんたい)の力と、それから心で弓を引いている。一生懸命、圧力と闘つて引いている。そういう心の力と身体(からだ)の力が一体になって、ある充実した活力になっていくことになりました。だから個人が弓を引いているんじゃないくて、人間が引いているんだという、そういうことなんです。そこには、あるものは引いている人間だけで、個人はそこでもう居なくなつてゐる。そういう意味で一本の射に個人の利己的な或いは自己を主張するもの一切を放擲するという意味で、そういうことで弓を引くという立場から見ますと、一射絶命は引く心構えというものを一番適切に言つている言葉だと思いますね。

金光： そうすると、その一本、矢を射る度にですね、まあ文字通りいくと、そういう自分が、自分がなんて思つているのは、全部もうそこで、死ぬという言葉を使うのが適切か。要するに生きていないんだと。それでその弓だけに自分を通して、先程の言葉で言つと人間、個人じゃなくて人間が弓と一体になって、それで弓が自然にある状況になると放れていくと。毎回そういうことを繰り返すということでございますか。

千葉： そういうことですね。そういう考え方は、実は弓の精神ですから、勿論、阿波先生だけじゃなくて、立派な弓を引く方は皆さん同じような趣旨を言つておられます。それで、例えば、「無発(むはつ)の発(はつ)」という言葉がありますけれども、

金光： 発は出発の発という字で、ないの無という字、発しないで発するという。

千葉： 自分で発しようと思わないで、自ずからに発するという、そういう言葉と目標は他の方にもあつたんですが、それからまた、阿波先生の兄弟弟子の中には「絶命一射(ぜつめいつしや)」という言葉を使つておられる方もおられるんですね。しかし阿波先生は「一射絶命いつしやぜつめい」ということにしました。これはやはり「自分のその大爆発に至つたような体験からして出て来たので、私はいいい表現であると思いますね。

金光： 大爆発の時は、恐らくその自分とか、なんとか全部無くなつて、飛んでしまつてゐるから、それはもう死んだと同じだと。

千葉： そうです。

金光： それは同時に、新しい再生ということでもあるわけですね。

千葉：　そうですね。

金光：　その他には、どういう言葉を使っていらいしますか。

千葉：　一射絶命の境地を射手本人の立場ではなくて、外から客観的に見ますと、個々の人間、自分の小賢しい欲望を持った有象無象の個々の人間が、一切居なくなってしまうてですね、そこにあるものは、今言った、心と身体が合致して、人間の力、つまり人間の本性(ほんせい)がそこに顕(あらわ)れているということになるわけです。人間というのは、宇宙の一つですから、そうして人間の本性が顕れるということとは、宇宙の本性も顕れるということ、そこで人間も宇宙も一体となった大宇宙の真理がそこで顕れるということになる。それを、射の中に、そういう人間宇宙の全てが顕れるという意味で「射裡顕現(しゃちけんげん)」と言っているんですね。

金光：　ああ、成る程。

千葉：　その言葉はもともと禅宗の「見性成仏(けんしようぶつ)」という言葉から来ておりまして、弓を引く方は、この言葉が大変好きですね、よく使っていますが、成仏というと仏教そのものですから、そこでこれを「射裡見性(しゃちけんしょう)」と言いかえた言葉が大抵の方が言っておられるんですね。

金光：　それは見性、禅で使う「見る」という字に、性質の「性」、「射裡見性」という言葉、ああ、成る程。

千葉：　つまり坐禅によって人間の本性を顕すという。

金光：　仏性とか、言葉を使ったりしますが、儒教もなさっていますから、天命を實踐するところに、中庸の道があるというようなことも、当然、この言葉の中には入っていらいしやと思います、その射の中に、そういうその大自然の法則と言いますか、本性みたいなものがちゃんと顕れるんだと。そうすると射だけでなく、何というか毎日の生活と直結したところでの表現ということになるわけですね。

千葉：　そうですね。ですから、阿波先生も長い間、「射裡見性」を使っていたのですが、晩年、顕現になった。私は、見性でもいいですけども、性せい(せい)というとか何かそこ間が蠢(うごめ)いて来るような感じもしますけれども、顕現とというと、宇宙の力が自ずからにパツと出て来るというふうな感じがして、私はこちらの方が好きです。

金光：　その辺のところを阿波範士、「自身(みづかみ)の言葉で、そういうところを表現されている。それをちよつと文字にしておりますので、紹介させて頂きますと、

「人間と弓との合致点まで行った時、射を行わんとする心も、射にある心も、結果を希(ねが)う心も、発せんとする心も、一切脱離して、無限の大きさに合致せんとする、大きさと軟らかさと安らかさと明るい世界に、初めて自己の本来の(仏性)大自然を識るのである。」

これは人間と弓との合致点に行った時に、今まで、千葉先生が話して下さったことが色々出ているわけですね。射を行わんとする心も、射にある心も、結果を願う心も、発せんとする心も、苦痛も入っておりますね。重荷を下ろさんとする心も、一切脱離してということですね。そうすると、自然に無限の大きさに合致しようとする大きさと、軟らかさと、安らかさと、明るい世界がそこに出て来る。そこにこの先程の言葉でいうと顕現したことは、自己の本来の大自然を知ることが出来るというわけですね。

千葉： 弓を引くというのは、一本引くのも大変苦しいことなんですね。

金光： やっぱり苦痛ですか。

千葉： 大変です。とにかく弦を最初の中はまだ緩いですが、引き絞ると、もう大変な強い力で圧力が架かって来ますね。それを持ち堪えようとすると、これは体力で持ち堪えるのと同時に、それを阿波先生が言われたように、自分を超越して放れるまで待つ。これは弓で「もつ」、持ちこたえるというのですが、とにかく持っていなければならぬ。それは心の面と、それから身体の面と両方から言って苦しいですね。早く逃れたい。逃れたいから、いいところパツと放してしまう。しかしそれがいけないので、徹底的に倒れるまで持てとさえ言って我々に教えられるんですね。そのことによって自分から超越するのだと思います。先程、金光さん、死ぬとおっしゃって下さいましたが、死ぬのも自殺じゃないんですね。自分で死のうと思って死ぬんじゃないで、その苦痛と闘って闘って、もう最後の自分の力も無くなるところまでやらなければいけない。そこで自ずから死ぬことになるという。そういうことなんだと、私は思うんですね。

金光： それはそうでしょうね。死ぬというのも、本当は自然に普通のほとんどの人は自分で死のうと思わないでも、ちゃんと息が出なくなると、自然に死ぬるように出来ているわけですから、いわば弓の中で、自然に死ぬるような状態まで持っていくという、そういうことではないですかね。もう一つの言葉というのは、どういうことではないでしょうか。

千葉： そういうように、一本の弓を引くにも、自分と闘うということをやって来るわけですね。そうしますと、私は阿波先生の「常住射裡(じょうじゅうしゃり)」という言葉が大変切実になってくるんですね。

金光： 常に射の中に住んでいると、そういうことですね。

千葉： そうです。これを表現するに、先生の言葉もありますので、ちょっと読んで見ます。

金光： じゃ、先生の言葉を紹介しますと、

「人間は、一矢の射行である。不識の間に修養を積み、一切の迷見を脱離して、善化して行きつつ、永遠の生を得るに依つて、一射中には(結果、性欲、名望、不安、闘争、競争等を)脱離せしめられて、真の自己本然を見る」との出来得るが故に、即ち人間救済の大教ならずして何ぞや。」

これは矢を射るということは、人生そのものであると。不識、知らない間に修養を積んで、一切の迷いの見方を脱離して、よくなつて行きながら、永遠の生を得ることが出来るということだから、その一射中には射の中には、結果もなければ、性欲も、名望も、不安も、闘争も、競争等も全部射の中では脱離せしめられると。そうすると真の自己本然を見る事が出来るから、これは人間救済の大きな教えであると。人間を救う道が射の道であるところまでおっしゃっているわけですね。

千葉： そうですね。そういう広いところまでおっしゃっておられますけれども、自分でこの言葉を聞きますと生活の場は全てが射であると、そういうふうな思いが出てくるんですね。これは弓を稽古するには、先生は放しちやいかん、放れるまで待てというんですね。色々工夫し努力しないと、それが出来ない。呼吸法にしてもですね。それを飲み込むのに、頭で解るのに、何年もかかる。実行出来るのに、更にかかります。それから道場に出て、弓を持って進む、退く、出処進退ですね。それについても、引く時だけ、ちゃんとすればいいんで、あとはパツと駆けて行ってやった方がいいかということはないので、道場に入る時から、弓を引く積もりで、身体を整え動作もしなければいけませんし、

それから道場でなくても、その外で学生が勉強している時でも、やはりその呼吸をしながら、勉強するとかですね。つまりそういう弓の稽古を生活の場ではないかと、肝心の弓が引けるようにはならない、そういうことで稽古せざるを得なくなりますね。

金光：　そうするとですね、「常住射裡」ということは、その射に、弓を射るといふ、その心構え、或いはその実践が出来る、と、弓だけではなくて、日常の全てのことに、それが応用出来る、という言い方も出来るわけですね。

千葉：　そうですね。むしろこれで、弓の稽古は一丁上がりと言って済んでしまうようじゃダメなので、その弓の心で自分の生活をしていく。そのことによって自分の生活が出来る、或いは人としての仕事が出来るといふことでなければいけないと、そういうふうな受け取るんですね。

金光：　成程。

千葉：　事実、私は、学問の世界でもう難問だらけですね。研究を進めて参りますと、至るところで真つ暗闇にぶつかると。どうしていいか分からなくなる。もうこの辺で投げ出したくなる。もっと明るい方に行つて人がみんなやっているようなことを一緒にやりたくなるんですね。そういう時に、ここで逃げちゃいかん。やっぱり自分の欲望で逃げちゃいけないので、ここで一射絶命しなきゃいかんと思う。結果的に出来たかどうか分かりませんが、苦しいことにぶつかると、やはりそういうふうに自分で自分を励ます。お前はそれで阿波先生に弓を習つたと言つて恥ずかしいかというふうに、声がかかる思いがしますね。

金光：　そうすると、弓というのは、いわば自己との闘い、それがどう常に射の中で訓練されると言いますか、修練されるということではないでしょうか。阿波先生の言葉で非常に面白いと思つたのは、射は自己なりと。道元禪師の言葉で「仏道とは、自己を習つ」なんていうのがある。これに非常によく似た言葉で、

「射は自己なり。弓を習つ」ということは、自己を習つのである。自己を習つということとは、自己を忘るるなり。自己を忘るる時、万法宇宙来たつて、我を証するものなり。天地もとより、全自己にして始めなく終わりなしの言いである。天地我と同根、万物我と一体という。」

これは仏教的な表現をされておりますけれども、今、先生がおっしゃっていた「常住射裡」というようなことが、生活の中に実行出来るようになって来ると、もう自分と天地が、宇宙の中で一体の中で生活が出来る。だからそういうなんかうまく行かないなあと思つている時があつても、それはそれで、そこで止めたなんとか言うんではなくて、やはりその次の目標に向かつて訓練をしていくと、そこにまた、新しい自己との闘いの次に新しい世界が開けて来る。そういうことの連続ということになるわけですね。

千葉：　そうですね。今、実行出来るようになるぞ、とおっしゃいましたけれどもね。実は実行出来ないんですね。そう思いながら、ああ、ダメだ、やっぱり自分は失敗しちゃった、出来なかったと覚ります。しかし同時にこの次に何とか少しでも、一歩近づきたいと思う気持ちでやっているだけですね。

金光：　弓の練習でも、やっぱり出来なかったら止めるということじゃ、もう進歩がないわけですから、出来なくとも、また、次やると。で、こういう大先達がいらっしゃると、そういう大先達の教え、そういう方が到達された世界というのは、明らかに「現前するわけですから、そういうものに少しでも近づけると、自分の中で、そういうものをその射の中で訓練すると、そういうことが連続していく」という、そういう「現前する」ということですね。

千葉：そうですね。ですから自分ではそういう弓を日常生活で引きたいと思っても、それが出来ないでいる。出来ないでいるけれどもいつかできることを目指して続けることです。実はこの世の中を見渡すとそれと同じような努力をしておられる人は一杯いるわけですね。勿論、武道家にもいますし、それからスポーツの世界でもですね。特にあの人間では考えられないような大記録を立てたり、立派な成果をおさめるというようなこの人たちの努力と心境というものは、やはり弓の心と共通するものがあると思うんですね。そういう表に立つような立派な記録ばかりじゃなくて、名も知れない庶民で、自分の生活を地道に、真面目にやっています、人間として立派な生活を送っている方は、隠れたところに大勢いらつしやる。そういうふうに考えますと「常住射裡」というのは、個人だけの人生観じゃなくて、人間というのは、全てそうありたいと、また、そういうことを目標として狙ってもいいものがあると、そういうように感じますね。そういう意味で「常住射裡」は、誰にでも適用するところの真理だと、私は考えておりますんです。

金光： そのところで、阿波範士のおつしやる言葉の厳しさというのは、その例えば、的を狙っちゃいかんと、或いはその放そうと思っではいかんとか、いわばその人間の個人のエゴ的なものが働きやすいところを、そのところをやっではいかんのだということと、訓練、練習させる。そういういわば天地宇宙のその流れと、自分の動作、或いは心の用い方みたいなものを、如何に一体化させるかという。そこで随分、先生の方も苦心なさっているし、ヘリゲルさんなんかも、そのところで苦闘をなさった後で到達された、そういうことでございましたね。

千葉： そう思いますね。だから、そういう大目標を持ちながら、それが実現出来ないでいると、お前ダメだと言ってしまうんです。ダメなものが、むしろ人間なので一つ一つそれを求めてやっていくことを弓だと、こういうお考えのようですね。

金光： そういうところがあつたから最初に、千葉先生が初めてお会いになった時に、ダメでも何でもおつしやらない「温容」と、それから少々うまく行っても、それじゃまだもつと先があるんだと、そういう「厳しさ」、何か自然にそういうものをお感じになったということでしょうかね。

千葉： そう思いますね。後になって見ると、ああ、そうだったなあというふうに思い直します。

金光： そういう方が、昭和の初めまで、現実生きていらつしやったということは、私たちにとっても大きな目標として、その目標とすることが出来る、非常に有り難い方がお出でになったものだなあという気が致しますが、今日はどうも色々ありがとうございました。

千葉： 至りませんが、お話ありがとうございました。

平成八年二月四日NHK教育テレビ「この時代の」

(その他)・・・ウェブ情報

「阿波研造の全体像を知るには」

北大体育会弓道部ホームページ 玉川先生遺稿集部史Ⅲ

「射聖 阿波研造と現代の日本弓道」

「阿波研造とオイゲン・ヘリゲルとの遣り取りについて」

身体技法の模倣と創造——オリジナリティとは何か(Ⅲ)

山田奨治(国際日本文化研究センター)

二〇一四年七月二九日 井田 晃記

